

テーマ：「戦後70年について思うこと」(県立尼崎北高校 放送部)

(8/27, 30 放送分)

稲村 皆さん、こんにちは。尼崎市長の稲村です。今回も、元気いっぱい、市内の高校生の皆さんによる番組をお楽しみいただきましょう。

それでは、さっそくスタートです。どうぞ。

大野 皆さん、こんにちは。尼崎北高校 放送部です。

今年で戦後70年となりますが、私たちは、戦争のことについてあまり知りません。ですから、実際に被害に遭われた皆さんにお話を伺おうと思います。

インタビュアーは、大野加奈子、

富士枝 富士枝沙季、

池田 池田美佐子、

大野 が、お送りします。

本日は、尼崎市原爆被害者の会 会長 山下喜吉さん、事務局長 山家好子さん、そして、東山照子さんに、スタジオにお越しいただきました。

富士枝 富士枝がお話を伺います。

東山さん、お話の続きですが、被曝後、町が壊滅していたと思うのですが、食べる物などは、どうされていたんですか。

東山 はい。私が住んでいた所は、壊滅状態の、家が壊れたり、そうした所ではなかったのですが、わたくし達の家庭は、あんまりコロッと食べる物のが変わったりはしませんでしたけども、もう原爆が落ちる前から、あんまり食べる物は、人間らしい物は食べてなかったもので、近所のお百姓さんの物もったり、草を採ってきて食べたり、山に行くと木の実を採ったり。10歳ですから身も軽いし、手当たり次第、物食べましたね。

だけど、海が近いもんだから、海へ行って、貝を採ったり、カキを採ったり、たんぱく質は、母がいつも言っていました。てるちゃんのおかげで、たんぱく質は十分取れるけど、配給ってというのが、お米なんかは、着物を母が持って行って、着物、今頃だと何万もするような着物でも、お米「一升」って言ったら、今頃はキロで言うからわずかなお米を交換してきて、食べさせてくれましたね。その時期に、母の私が3歳の時に亡くなって、新しい母が戦争中に来てくれたんで、その母が一生懸命持って来た物を、お米に、芋に変えて、食べさせてくれたのを覚えていますけど、着る物は全然無くなりましたね。

広島近くの所から、また田舎の方に入りましたから、その時にはもう、着る物の荷物はありませんでしたね。母が全部、お米か芋に変えたと思うんです。広島市内の実家の方は、おじさんにお嫁さんがきたので、食べる物は十分って言うより持ってきてたもんで、「ばあちゃんどこ行く」って言っ

ては、その食べる物を食べさせてもらいに行きよったんですけど、母に悪いと思って、それも行かなくなりましてけど、悲惨な日々でした。

富士枝 山下さん、被曝前の生活に戻れたのは、どのくらい経ってからですか。

山下 幸いと言うか、私、海軍におりましたので、戦後も一ヶ月ほど残務整理してましたので、食料は、海軍で備蓄はありましたし、宿舎もございました。人様よりは幸せやったんじゃないかと思います。食べ物に対しても、住む所に対しても。約一ヶ月残務整理しましたね。それから復員しましたけども。戦後すぐは、割と食べる物も不自由なく食べましたので、幸せやったと思います。

富士枝 どのように復興していったのか、ご覧になられましたか。

山下 言ってみたらまだ 16～17 歳の子供ですからね。どういう復興してくれるのか、復興できるのか、自分自身のことわかりませんし。まして個人的にも私、両親おりませんでしたから。天涯孤児でしたから。まったく方針がつかめなかったです。「成り行き任せ」と言うたら酷いですけども、「成るよにしか成らないだろう」と、割と気楽な考えで生きてきました。

池田 ここからは、池田がお訊きします。

私たちは、戦争が終わって半世紀近く経って生まれました。戦争も原爆も、直接は知りません。平和な世の中で生きています。今の平和を守り続けるために、私たち一人ひとりが何に気をつけなければならないのでしょうか。

まず東山さん、お願いします。

東山 はい。戦争が終わって 70 年経ちますので、その 70 年間、私は戦争が終わってから、ずっと食べて生きていくことに一生懸命と、弟が二人生まれましたので、その子のこともあるし、中学校出るとすぐに働きに出て、家族のためと思って働いてきましたけど、昭和 25 年に働きに出たと思うんですけど、その時はまだ食べる物が、お米の中に、ご飯の中に大根が入っておりまして、その大根のご飯も、おいしく、たくさんよく食べて元気でしたね。

一生懸命働けるだけ働いたような気がしますけど、ふと気が付くと、自分も結婚し、子供が二人でき、男の子ができ、健康でよく働き、世の中も平和になり、食べたい物は食べられて。やっぱりこれが平和かと思う気持ちが湧いてくるっていうのか。昔のことはあんまり思い出さないように、がんばって生きてきたように思うんですけど、歳も 80 歳になりまして、ちょっと足が痛いんと、物忘れがひどくなりましたけど。でも、戦争のこの話が出て思い出すと、「大変だったな」、「惨めだったんだな」と思いますけど、みんな仲良く元気に、被曝者であってということも忘れて生きてきましたけど、これからも、若い人達はやっぱり健康で、仲良く、我がまを言わないで、平和を保つように。今も憲法のことがどうこうって言いますが、憲法でも戦争しないっていう時には本当に、「ああ、戦争しないって本当にいい事だ」って思いましたけど、そういういい事はちゃんと、やっぱり若い人で守って、がんばって生きていっていただけたらいいなと思いますね。

池田 山家さんは、いかがでしょうか。

山家 はい。戦後本当に 70 年、あっと過ぎたような気がします。70 年といえば、結構長い年月だなと思います。でも、戦争第 9 条ですね。あれで戦争に参加することもなく、本当に平和におくってきたと思いますんで、こういう憲法は守っていただきたいなど。子供たちも、本当に仲良くですね、相手の心を思いやる、その思いやりというもんがやっぱり少ないのかなと思ったりしますし、政治に対してでも「無関心」ゆうのが多いんで、やっぱり「無関心」ゆうのが一番怖いと思うんですね。皆一人ひとり「戦争とは何ぞ」、「平和とは何ぞや」と、みんなでその一人ひとりが真剣に考えていただきますと、戦争に巻き込まれないようにせんといけませんのでね。本当に今から何十年、もう私たちもい

つまでも生きておりませんが、原爆の話をですね、若い人に本当に語り継いでいって、継承していただきたいという思いが、いっぱいでございます。本当に、平和な日本であればいいなと、もう心から思っております。

池田 山下さんは、いかがでしょうか。

山下 はい。私は終戦後、海軍にいましたけども、その後はもう行く所もなく、何にも無いあの時代に、幸せなことに海軍で受けました教育をもとに、戦後生きてきました。裸一貫、精一杯に働いて。ですから今の若い人も、学生は学生なりに勉学に励んでください。一般の人は、それぞれ自分のことに邁進してほしいと思います。戦争をやってはだめです。ですから、戦争をしないような法律を作っていたら、戦争をしないような教育をしていただいで、戦後をますます穏やかな世界にして欲しいと思います。

わたくし、今、最高に幸せでございます。こうして戦後 70 年、現在 86 歳、もうやがて 87 歳になりますけども、こうして皆さんとお話できたり、仕事も現在まだやっております。全部やっているわけやないですけども、必要な難しいことがありますと、私とこに来ますので、仕事やっております。ですから若い人は勉学に励み、仕事に励み、精一杯働いて、平和な日本を築いて欲しいと思います。ただそれだけです。

池田 ありがとうございます。

阪神・淡路大震災や、東日本大震災のような天災を防ぐことはできませんが、戦争は防ぐことができます。そのためには、私たち一人ひとりが健康で仲良く、お互いを思いやり、政治への関心を持ち、勉強や仕事に邁進していくことが、大切だと実感しました。

私たちは、実際に戦争を知らないので、本日は、山下さん、山家さん、東山さんにお越しいたき、戦争の体験のお話を伺いました。

インタビュアーは、池田美佐子、

大野 大野加奈子、

富士枝 富士枝沙季、

池田 で、お送りしました。

全員 ありがとうございます。

以 上